〈 連載325 〉

35年ぶりの地中海クルーズ（その1）　ジェノバ港

大阪経済法科大学・客員教授
池 田 良 穂

３月末、久しぶりに地中海クルーズを楽しんだ。イタリアのジェノバ発着の１週間クルーズで、イタリア半島より西側の地中海を１周するクルーズだ。古くからの定番クルーズだが、かつては１～２万総トンの小型船が中心で、イースターが終わってから10月までの季節的なものだった。筆者が乗った前回のクルーズは、ドイツの旅行社が年間チャーターしていたソ連船「アゼルバイジャン」という13252総トンの船で、ちょうどドイツに留学していた時に、イタリアの大学に招待された機会にジェノバ港から乗船した１週間クルーズだった。寄港地は、マルタ島、チュニス、バルセロナだったように思う。

それから35年ぶりの地中海クルーズで乗船したのは、17万総トンの大型船「MSCメラビリア」だった。完成して１年のピカピカの新造船である。しかも、今では、年間を通した地中海クルーズを行っている。冬場は荒れることもある地中海だが、10万総トンを超える大型船が就航できるだけの需要が生まれ、船酔いの心配なしに通年のクルーズが可能になったのだ。

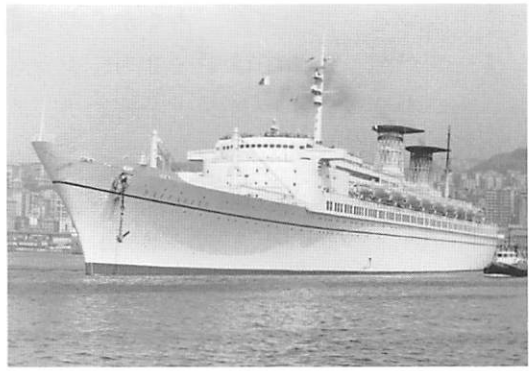
さて運航する船会社MSCは、メディタリニアン・シッピング・カンパニーの頭文字をとったもので、日本語に直訳すれば「地中海海運会社」で、コンテナ船事業で急拡大したスイスに拠点をもつ巨大海運会社である。クルーズ事業にも参入して、３つの北米の現代クルーズのパイオニア企業に迫る勢いで急成長して、今は17万総トン級船の連続建造を行っており、「MSCメラビリア」もその１隻である。北米企業がほとんど支配しているクルーズ業界においては、注目される欧州の新興地場企業であるが、一気に世界展開を始めている。今年完成の同型姉妹船「MSCベリッシマ」は地中海クルーズに就航した後、アジア水域に転配されるという。

MSCの地中海クルーズに乗船するのを決めたのは、日本発着の同社のクルーズ客船「MSCスプレンディダ」の日本一周クルーズに乗船して、すっかり気に入ったのと、拠点である欧州での同社船のクルーズを体験して、その成功要因を分析してみたかったから。700万人のクルーズ人口までに成長した欧州のクルーズ界の中での立ち位置も実際に体験して実感として理解したかった。

日本発着クルーズにも就航する「MSCスプレンディダ」。横浜港での撮影。

さて、乗船したジェノバ港は、イタリアの古い港町で、コロンブスの銅像や館も観光スポットとして定着するところからもその歴史の長さが覗える。帆船の時代から汽船の時代に入ってからは、大西洋横断航路の定期客船の玄関港として機能していたが、今は、フェリー基地およびクルーズ客船の発着港として毎日たくさんの客船が出入している。旧港はほぼ円形の形をしており、その中心に向って放射状に桟橋が並んでいる。

この港を最初に訪れたのは、筆者がまだ大学院の学生の頃で、欧州の港町を１ケ月かけて回った時であった。その頃は、すでにかなり廃れつつある港町で、きたない安宿に宿泊して毎日港に通った。ちょうどイタリア客船の「ラファエロ」が引退間近で、その出港シーンをカメラに収めるために、港の出口付近の防波堤で長時間待ったことを今でも鮮明に覚えている。港の周辺に広がる旧市街は、狭くて暗い路地が入り組んでいて、かなり物騒な雰囲気だった。



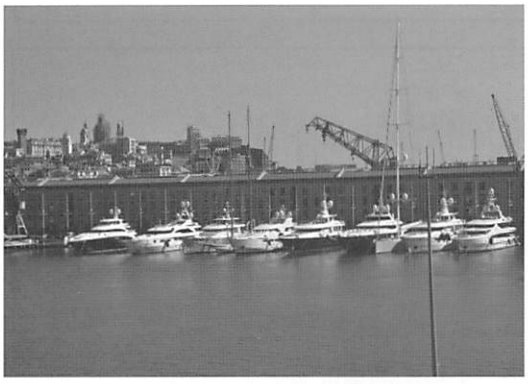
1973年に筆者が撮影したジェノバ港を出港する伊大西洋横断定期客船「ラファエロ」。

しかし、現在は、かつての港の主要機能を担っていた旧港の岸壁の半分近くがウォーターフロントとして再開発され、海事博物館、水族館、ホテル、ショッピングモール、ヨットハーバーなどに変身して、週日でもたくさんの市民や観光客で溢れていた。

またフェリー埠頭も大規模に再開発されて、大型フェリーが着岸できる近代的な姿に生まれ変わり、また、かつての定期客船ターミナルを中心としてクルーズ客船岸壁

が着々と整備されつつある。

港の一画のヨットハーバーには、豪華なプライベートボートが並んでいて乗組員は整備に余念がない。カルロス・ゴーン氏がこうした豪華ヨットを購入して「社長号」と名付けたのも、こうしたボートの所有が、欧州でのステイタス・シンボルの１つであったからに他ならない。もっとも、一般庶民である筆者が乗るのは、１泊２万円余りで移動、宿泊、食事、エンターテイメントまでオールインクルーシィブ料金のクルーズ客船「MSCメラビリア」だが、そのクルーズの期待に胸をおどらせて乗船した。



豪華プライベートボートが並ぶジェノバ港の一画

ジェノバの客船ターミナルに着岸する「MSCメラビリア」。17万総トンの巨大な船体が印象的。

さて同船の１週間西地中海クルーズは、ジェノバ、チビタベッキア（ローマの外港）、パレルモ（シシリー島）、マルタ島、バルセロナ、マルセイユに寄港してジェノバに戻る。このクルーズでは、どの港からでも新規の乗客が乗ることができるインターポーティングという手法でのマーケッティングをしており、イタリア、スペイン、フランス各地のクルーズマーケットの開拓を行っている。ジェノバのクルーズターミナルでも、新規の乗客用と寄港客用の２つのゲートがあった。ジェノバからの新規乗船客は1000人余りだったので、全乗客の約1/4にあたる。イタリア、スペイン、フランスからほぼ同じくらいの比率での集客ができているようだ。ちなみに、日本からの乗客もJTB、HIS、ジャパネットなど100人単位での団体客が乗船していた。

乗船手続きは、カウンターでパスポートを預けてクルーズカードをもらうだけの極めてシンプルなものだった。EU内の航路なので、国内航路とかわらないためなのであろう。ターミナルの搭乗ゲートの前には、MSCプレゾーサの大きな模型が飾られ、門型に飾ったゲートには、MSCの15隻のクルーズ客船隊のプロフィールが並んでいた。

クルーズの様子は次回にご報告したい。

MSCの15隻のクルーズ客船のプロフィールが描かれた乗船ゲート。同社のクルーズ界での急躍進がわかる。